

日本における感動と Awe の弁別性・類似性

前浦 菜央¹ 中山 真孝² 内田 由紀子²

¹ 京都大学大学院人間・環境学研究科 ² 京都大学こころの未来研究センター

The discriminability and commonality
between awe and “kando” (being emotionally moved) in Japan

Nao Maeura¹ Masataka Nakayama² Yukiko Uchida²

¹ Graduate School of Human and Environmental Studies, Kyoto University

² Kokoro Research Center, Kyoto University

This study focused on two similar but potentially distinctive emotions, awe and being moved. Although these emotions have been studied independently, they have commonalities both in cognition and emotion. For example, both have been shown to influence cognitive frameworks (Tokaji, 2004), such as *need for accommodation* (Keltner & Haidt, 2003). In addition, when instructed to write about being moved, Japanese descriptions resembled descriptions about awe in Western descriptions (Hashimoto & Ogura, 2002; Shiota, Keltner, & Mossman, 2007). In this study, we hypothesized that these two emotions overlap in linguistic labeling and in perceived emotional states. To test this hypothesis, we conducted two survey studies in Japan. Study1 examined how people labeled emotional states caused in various awe-inducing and being-moved-inducing situations. Study1 indicated that some of typical awe experiences were likely to be labeled as being-moved experiences. Study2 showed that the experience of awe was more similar to an emotional state of being deeply moved by a life event, than being normally moved by a daily event. Therefore the present studies suggest that being moved and awe are more likely to overlap when the situation is a deeply moving life event.

Keywords: being emotionally moved (感動), awe (畏怖・畏敬), discriminability (弁別性), commonality (類似性)

Received 21 November 2019; Accepted 3 June 2020

1. 問題

感情経験には記憶にとどまらないものから、生き方や考え方に深く影響を与えるものまで幅広く存在する。後者には強い感動あるいは“Awe”と呼ばれる感情経験が含まれる。これまで感動と Awe という 2 つの感情経験は独立して研究がなされてきたが、これらの研究を統合的に検討すると、感動と Awe の感情経験には重複する部分があることが示唆される (橋本・小倉, 2002; Keltner & Haidt, 2003; Shiota et al., 2007; 戸梶, 2004)。本研究ではこの 2 つの感情経験の類似性と差異について、実証的に検討する。

1.1 感動研究の概観

感動を引き起こす対象は、結婚など自身のライフ

イベントに関わるものから、対人関係や映画など日常的なものに至るまで多岐にわたる (Menninghaus, Wagner, Hanich, Wassiliwizky, Kuehnast, & Jacobsen, 2015)。つまり、感動という語で表現される状況には、日常的な小さなものも、人生に一度しか起こらないような大きなものも含まれる。このように感動という言葉は多様な状況に対して用いられ、それゆえに感動の一般化された定義づけは存在していない。感動経験の研究としては大別すると 2 つのアプローチがある。1 つは感動の特徴を理論的にある要素に特定したうえで操作的に定義して検討する「トップダウン」のアプローチであり、もう 1 つは人々が感動と呼ぶものを広義の感動として仮に定義し、その特徴を「ボトムアップ」に検討しようとするものである。

前者のトップダウンのアプローチと呼べるものと

して、Cova & Deonna (2014) は、“Being moved” という感情は出来事の中で強調された望ましい価値（例：愛、友情、勇敢さなど）を知覚することにより生じるものであると定義している。価値の顕現化が感動に関わることは加藤・村田 (2013) の実験的な研究でも確認されている。そこでは他者への愛や共感への志向性が強い人ほど、その価値が強調された短いアニメーションに感動した程度が高かったことが報告されている。加えて、Strick & Soolingen (2017) は、特定の価値が顕現化しない文章の後に価値が強調される文章を読むと、より大きな感動が生じることを示している。これらのことから、感動には Cova & Deonna (2014) が論じている通り、価値の強調・増幅が関連しているといえる。

さらに、感動の価値の側面の中でも「愛情」を扱った Kama Muta という感情経験に関する近年の研究においては、Kama Muta を他者とのつながりの強化（新たなつながりができたり、今まであったつながりがさらに強くなったりすること）により生じる感情として定義し、しばしばその経験は「感動」という言葉で呼ばれることを示している (Fiske, Seibt, & Schubert, 2019)。Kama Muta が生じると、人はその Kama Muta 体験に他者を巻き込みたいと思ったり、さらなる Kama Muta 体験をしたくなったりすることが述べられている。

これらに対し、感動と呼ばれる感情経験の特徴を網羅的に検討するボトムアップなアプローチとしては、Menninghaus et al. (2015) がドイツで感動経験の自由記述を集めた研究が挙げられる。集められた感動経験には友人関係など社会的相互作用における他者とのつながりに関するものが多いという特徴があり、さらに、結婚や死、出産など人生での大きな出来事に関する記述も多くみられた。日本人においても、社会的相互作用の場面での感動は頻繁に経験されており、感動経験の中核をなすと考えられる (橋本・小倉, 2002)。Menninghaus et al. (2015) では、感動経験の記述と同時に、その経験に伴う感情や認知に関する項目の評定も回答者に求め、感動は強い感情経験であるが、覚醒度は高くなく、喜びまたは悲しみを伴うものの割合が高いという特徴が見られた。

こうした感動が持つ機能として、人の動機づけを高める、認知的枠組みを変化させる、他者への受容性を高めるなどの効果があると結論づけられている

(戸樫, 2004)。しかしこれらの点については実証的な研究が少ないのが現状である。一方で、感動が経験される状況や感動が人に与える影響には、以下でレビューする Awe として概念化・理論化されている感情経験と類似する点も見受けられる。

1.2 Awe 研究の概観

近年、北米を中心に Awe¹⁾ という感情経験の研究がなされている。Keltner & Haidt (2003) は、様々な学問分野において Awe の感情経験がどのように記述されてきたかを検討した。そして、Awe を定義づける中心的な要素として、次の 2 つを同定した。第 1 の要素は、「存在の大きさ」であり、例えば自然の雄大さや災害における自然の力強さ、人物の偉大さ、神のような存在などを含む。第 2 の要素は「自分の理解の範疇を超えており、認知的枠組みの変更の必要性が感じられること」であり、当人の世界に対する理解を超越する存在の大きさを解釈するため、新たな世界の見方や考え方を必要とする状態のことである。本研究もこの枠組みに基づき、存在の大きさと理解を超えているという感覚を伴う感情経験を Awe と定義する。Awe を経験した際にはこれらの 2 つの要素により、世界に対する理解が揺るがされたという感覚や、自己の小ささという感覚が生じると報告されている (Campos, Shiota, Keltner, Gonzaga, & Goetz, 2013; Piff, Dietze, Feinberg, Stancato, & Keltner, 2015)。

Shiota et al. (2007) による米国の学生への自由記述調査においては、Awe を経験する状況は自然や芸術・音楽に関するものが多くみられたと報告されている。また、Awe 経験が人に与える影響として、「自分は大きな全体の一部である」という自己概念が増加することや (Shiota et al., 2007)、向社会的な行動をとるようになることが示されている (Piff et al., 2015)。このように Awe の感情経験はその人の考え方や行動に影響を与え得るものである。

1.3 Awe と感動の共通点と差異

以上のように、Awe と感動の 2 つの感情経験はそれぞれ独立に研究がなされてきた。実際これらの感情経験は、感情が生じる状況や結果として生

1) 日本語において Awe は「畏怖」、「畏敬」、「畏れ」、「畏まる」という言葉などに対応するが、特定の言語ラベルとしてではなく、あくまで学術的な定義として取り扱うため、Awe という用語を本稿では用いる。

じる身体反応に差異があることなどから、同一の感情経験ではないと考えられる。上述の通り、感動が経験される状況として頻繁に現れるのは、家族関係や友人関係などの社会的相互作用の場面である (Menninghaus et al., 2015)。一方で、Awe がそのような文脈で経験されるという先行研究は見られない。偉大な人物に出会った際に経験する Awe は社会的な場面で生じるものであるが、あくまで社会的地位が自分よりも上の者に対して感じる壮大さの認知経験であり、感動のように家族や友人など身近な他者や同等の立場の者とのつながりを確認することで生じる感情とは異なる。さらに、Awe は天災のような一見望ましい価値が見いだせない状況に対しても生じ得る。一方で感動は、災害が起こった結果としての共感性や互いの助け合いの価値の増大により引き起こされることはあっても、災害それ自体により引き起こされることは少ない。これに関連して、感動はより肯定的な感情と考えられるが (Cova & Deonna, 2014)、Awe は必ずしも肯定的な感情とは限らない (Keltner & Haidt, 2003; Gordon, Stellar, Anderson, McNeil, Loew, & Keltner, 2017)。この点においても、これら 2 つの感情は異なっている。

身体反応については、鳥肌のように感動と Awe のどちらにおいても生じることが報告されているものも存在する (感動については Schubert, Zickfeld, Seibt, & Fiske, 2016; Awe については Maruskin, Thrash, & Elliot, 2012)。一方で、感動は涙との正の相関が示されているが (Schubert et al., 2016)、Awe は Kama Muta に比べ涙を伴わないと示されており (Zickfeld, Schubert, Seibt, Blomster, Arriaga, Basabe, ..., Fiske, 2019)、身体反応における相違も見られる。

また、感動と Awe はいずれも人の認知的枠組みに影響を及ぼすという類似点がある。Awe はその特徴として、存在の大きさの知覚により人々の世界の見方を揺るがし変化させる (Keltner & Haidt, 2003)。感動も価値を通して世界の見方を変えうるものであり (Cova & Deonna, 2014)、それを経験した人の動機づけ、認知的枠組み、他者の受容に変化をもたらす (戸梶, 2004)。また、Awe が経験される対象として自然の広大さや芸術のすばらしさが頻繁にみられるが (Shiota et al., 2007)、日本人による感動経験にも同様の記述が 15% 程度存在する²⁾ (橋本・小倉,

2002)。

1.4 本研究の概要

本研究では Awe と感動の直接比較を以下の 2 つの観点から行うことで、これら感情の類似性と差異を詳細に明らかにすることを目的とした。第一に、Awe 経験とされる自然や技術の素晴らしさが、少なくとも日本語話者には「感動」と呼ばれる重複経験となることを検討した。日本語において自然の素晴らしさなどに対しては畏怖や畏敬などの言葉が用いられることもあり、その場合に経験される感情は Awe であることが示されている (Nakayama & Uchida, in press)。しかし、畏怖や畏敬という言葉の日常的使用頻度は低く、大学生では畏怖や畏敬という言葉の意味を知らない人も 30% 程度存在する (武藤, 2014)。したがって、たとえ Awe を経験していても、言語ラベルとしてより頻度が高く、認知的枠組みに影響を与えうるという点で共通項をもつ「感動」という語が用いられている可能性がある (仮説 1)。

第二に、感動経験には日常的に生じる小さな感動から、人生に数度しか起こらないような大きな感動まで幅広いものが含まれているが、人の考え方に変化を与えるような感動経験は、どちらかといえばライフイベントに連動した状況下で生じると予想される。したがって特に強い感動経験は、認知的枠組みに変化が起こるという Awe に近い特徴を伴っていることが考えられる。よって、一部の強い感動経験は、Awe と考えられる感情状態を伴うが、日常的な感動経験は、Awe とはより弁別されることを検討した (仮説 2)。

研究 1 では仮説 1 の検討を行った。自然や技術・芸術に対する壮大さを含む Awe 経験と、それ以外の感動経験において、それらの経験がどの程度「感動」・「畏怖」・「畏敬」という言葉で表現されるかを確認した。同時に、自然や技術の素晴らしさに対する感情経験として Awe と考えられる感情状態が生じていることを確かめるために、喜びなどの他の感情や理解を超えていた程度などの認知評価の項目、身体反応に関する項目についても評定を求めた。

研究 2 では仮説 2 を検討した。人の考え方に変化をもたらし得るという Awe との類似性から、強い感動経験では Awe と考えられる感情状態が生じている可能性がある。そこで強い感動と日常的な感

2) ただし、ドイツで行われた感動経験の自由記述では、自然の美しさへの感動は 1% 程度しか含まれなかった (Menninghaus et al., 2015)。

動の自由記述を行ってもらい、それらの経験の際の Awe 経験に特有とされる認知評価の程度を比較した。加えて、Awe の感情経験についても自由記述を集め、感動と Awe の自由記述の内容にどのような共通性や類似点があるのかを検討した。

2. 研究 1

研究 1 では、先行研究を参考に集めた Awe や感動が生じるとされる状況を複数提示し、各状況に類似する自身の感情経験の想起・記述と、付随する感情や身体反応についての評定を回答者に求めることにより、感動と Awe がどのように分類・ラベルづけされているのかを検討した。そして日本語話者は自然や技術の素晴らしさに対する感情経験を、感動という言葉で表すという仮説 1 を検討した。

2.1 方法

2.1.1 回答者

クラウドソーシングサービスのランサーズを通じて質問紙への回答者を募集し、173 名がオンラインで質問紙に回答した。このうち、途中で回答をやめていた 22 名と注意チェック項目に正しく回答していなかった 2 名は分析から除外した。最終的な分析データに用いたのは 149 名（男性 79 名、女性 68 名、無回答 2 名）であり、年齢の範囲は 23 歳から 73 歳、平均年齢は 39.9 歳 ($SD = 8.77$) であった。回答者の海外滞在経験は経験がない者を含め 13 年以内（2 年以内が全体の 95.3%）であった。回答者には謝金として 150 円が支払われた。

2.1.2 質問紙

回答者は、提示されたエピソード（エピソードの抽出方法については後述）と同様の体験を想起し記述することが求められた。提示したエピソードは全部で 11 種類であり（表 1）、全ての回答者が 11 種類すべての状況について体験の自由記述と各項目の評定を行った。エピソードは回答者ごとにランダムに提示された。

回答者はまず、提示されたエピソードに対し、類似の体験がこれまでにどの程度の頻度で起こったかを「1. 一度もない」「2. ほとんどない」「3. ときどきある」「4. しばしばある」の 4 件法で回答し、その中で最も印象的なものを記述するよう求められた。ただし、頻度の項目は探索的に測定したものであり、

表 1 本研究で提示したエピソード

エピソード	
感動条件	- 悩みを抱えているときや苦境にあるときに、他者から励ましや慰めなどの援助を受け、人の温かみに触れた - 他者の言葉や、詩・文学作品・歌詞の中に、自分にとって大切なものを見つけた - 努力や苦勞の末に何かを成し遂げた - 自分のことを犠牲にしても、他者のために尽くす人の姿を見た/話を聞いた - 夢や目標に向かってひたむき努力する人の姿を見た/話を聞いた
感動/Awe 条件	- 雄大な自然を目の当たりにした - 素晴らしいパフォーマンス（絵画、演奏、職人の技、スポーツ競技など）を見た
Awe 条件	- 災害や事故の惨状を目の当たりにした - 神聖な場所や物に対して、神など人間を超越していると思われるものの存在を感じた - 圧倒的な能力や信念など、何か自分ではかなわないと思わされるようなものを持った人物に出会った - 偶然の出会いが連続したり、境遇が偶然一致していることがわかるなど、偶然を通して人との運命的つながりを感じた

研究 1 の目的に直接関連しないため、今回は結果の報告には含めない。各エピソードに類似の感情経験の記述の後に、その経験に付随して感情・認知・身体反応をどの程度強く感じたか、5 件法（感情項目：1. 全く感じなかった～5. 非常に強く感じた；認知・身体反応項目：1. 全くあてはまらない～5. かなりあてはまる）で評定を求めた。用いた項目は、「感動」「畏怖」「畏敬」「快さ」「不快さ」「喜び」「悲しみ」「驚き」「恐怖」という 9 個の感情項目と、「共感」「自分の理解を超えていた」「自分の考え方に変化があった」という 3 個の認知項目、「鳥肌が立った」「震えた」「涙ぐんだ」という 3 個の生理的・身体的反応項目であった。感動や Awe の感情経験に対し、日本語話者がどうラベル付けをするかを調べるため「感動」「畏怖」「畏敬」の項目を含めた。残りの感情項目と認知項目は、一般的な感情・認知の状態を知るために感動や Awe の経験に関連すると考えられるものを採用した。「快さ」「不快さ」は一般的な感情価を把握するため項目に含めた。「喜び」「悲しみ」は感動とともに経験されることが指摘されており (Menninghaus et al., 2015)、「共感」は感動との関連が示されている (橋本・小倉, 2002)。「恐怖」は一部の Awe 経験において経験されることが報告されている (Gordon et al., 2017)。「驚き」「自分

表 2 条件ごとの各項目の評定の平均値と標準偏差

条件	感動		畏怖		畏敬		快さ		不快さ	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Awe	2.49	0.721	2.34	0.860	2.27	0.891	2.06	0.668	1.88	0.662
感動	3.68	0.813	1.59	0.712	2.40	0.937	2.93	0.843	1.24	0.358
感動/Awe	4.31	0.764	1.97	1.12	2.80	1.22	3.48	0.990	1.13	0.420

条件	喜び		悲しみ		驚き		恐怖		共感	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Awe	2.21	0.700	2.02	0.636	3.81	0.869	2.42	0.691	2.06	0.779
感動	3.27	0.760	1.68	0.558	2.77	0.826	1.37	0.466	2.78	0.832
感動/Awe	3.89	0.905	1.20	0.474	3.69	0.959	1.47	0.747	2.49	0.980

条件	涙ぐんだ		鳥肌が立った		震えた		理解を超えていた		考え方に変化があった	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
Awe	1.87	0.758	2.70	1.11	2.47	1.02	3.25	0.988	2.64	0.943
感動	2.58	0.983	2.34	0.946	2.28	0.937	2.45	0.879	3.03	0.936
感動/Awe	2.29	1.10	3.48	1.16	2.80	1.09	3.27	1.13	2.63	1.13

の理解を超えていた」「自分の考え方に変化があった」の項目は Awe の要素である認知的枠組みの更新を要するという側面に関連する感情・認知の状態である。身体反応は、感動において「鳥肌」と「涙」が (Schubert et al., 2016), Awe において「鳥肌」と「震え」が関連する (Maruskin et al., 2012) とされているためこれらの項目を用いた。質問紙の最後に、回答者は年齢や性別などのデモグラフィック項目に回答した。

2.1.3 エピソードの抽出

まず、橋本・小倉 (2002) を参考に感動経験のエピソードを抽出した。その中で、Keltner & Haidt (2003) や Shiota et al. (2007), Gordon et al. (2017) において Awe 経験として挙げられている、雄大な自然に関するエピソードと素晴らしい芸術や技術に関するエピソードを感動/Awe 条件とし、残りの感動経験のエピソードを感動条件とした。Awe 条件は、Keltner & Haidt (2003) や Shiota et al. (2007), Gordon et al. (2017) で挙げられている Awe 経験の中から雄大な自然と素晴らしい芸術や技術に関するエピソードを除いたものを用いた。提示したエピソードは感動/Awe 条件が 2 種類、感動条件が 5 種類、Awe 条件が 4 種類であった。

感動/Awe 条件は Awe 経験であるにも関わらず感動というラベル付けがなされ、Awe 条件に比べて感動の評定値が高くなり、畏怖や畏敬の評定値が低く

なると予想される。しかし、ラベルによらない感情や認知、身体反応の項目の評定値においては、感動条件よりも Awe 条件に類似のパターンがみられると予想した。

2.2 結果と考察

分析には統計ソフトウェアの R 3.5.1 を使用し、パッケージ afex (Singmann, et al., 2018) を用いた。

まず、自由記述において提示されたエピソードに類似の経験が記述されていることを確認するため、第 1 著者ならびに研究目的を知らない学生の計 2 名がコーディングを行った (一致率 $\kappa = .62$)。そこで少なくとも一方のコーダーが、提示されたエピソードに類似の経験として不適切、あるいは記述なしと判断した記述は分析から除外した。加えて、11 個の記述のうち 5 個以上の記述が不適切、あるいは記述なしと判断された参加者については、教示を理解していたことが保証されないため、すべての回答を分析から除外した。

次に、感動条件・Awe 条件・感動/Awe 条件を比較するため、回答者ごとに感動条件、Awe 条件、感動/Awe 条件の各エピソードについて付随する感情や認知、身体反応の評定値の平均を算出し、条件ごとの各項目の評定の平均値について、有意水準を 5% として分析を行った (表 2)。まず、想起される感情 (3 条件) と評定を求めた項目群 (15 条件) を要因とし、評定の平均値を従属変数とする 2 要因被験者内分散

分析を行った。その結果、交互作用の効果が有意であった ($F(14.94, 2136.76) = 144.90$, $MSE = 0.50$, $p < .001$)。自由度の補正は Greenhouse-Geisser の方法で行った (以下同じ)。そこで、想起される感情 (3 水準) を要因とする 1 要因被験者内分散分析を各項目について行った。分散分析の結果が有意であった項目に関して、想起される感情の 3 条件においてあり得る全ての 2 条件の組み合わせについて t 検定を行った。この結果を表 3 に示す。

2.2.1 感動/Awe 条件で用いられる言語的ラベル

感動/Awe 条件に含まれていたエピソードである自然や素晴らしいパフォーマンスに対する感情経験は、Awe の感情経験と考えられるが、日本語話者では畏怖や畏敬ではなく感動経験であると判断されるというのが仮説 1 であった。このことを検証するため、感動/Awe 条件の「感動」「畏怖」「畏敬」の 3 つの評定項目に注目した。

感動/Awe 条件の「感動」の項目の評定値は、Awe 条件・感動条件のどちらと比べても有意に大きな値をとっていた。また、感動条件は Awe 条件よりも「感動」項目の評定値が有意に大きかった。これらは仮説 1 を支持する結果であり、自然や技術の素晴らしさに対する Awe を含むような強い感動は最も「感動」という表現にあてはまる経験となっていることが示された。次に感動/Awe 条件の「畏怖」項目の評定値は、Awe 条件に比べ有意に小さな値をとっていたが、「畏敬」項目は感動/Awe 条件で他の 2 条件に比べ有意に大きな値となっていた。畏敬の評定値が高くなると予想された Awe 条件での評定値が他の 2 条件に比べ小さくなっていることから、畏敬が感心や驚嘆などの尊敬概念を表す類似の言葉 (武藤, 2014) と混同して認識された可能性も考えられる。ただし、感動/Awe 条件の「感動」と「畏敬」項目の評定値について t 検定を行うと、「感動」の方が「畏敬」よりも有意に大きな値をとっていた ($t(143) = 15.45$, $p < .001$)。これらのことから、感動/Awe 条件の自然や技術のすばらしさに対しては、「畏怖」や「畏敬」に比べ「感動」というラベル付けが行われやすいと考えられる。

2.2.2 感動/Awe 条件での実際の感情経験

感動あるいは畏怖や畏敬という言語的ラベルに関わらない項目に関して検討を行った。Awe の中心要

素の一つである「理解を超えていた」という感覚を感じた程度は、感動/Awe 条件と Awe 条件で感動条件より有意に大きく、感動/Awe 条件と Awe 条件の間に有意な差はなかった。このことは、Awe は「理解を超えていた」という要素を含むとする Keltner & Haidt (2003) の定義と一貫している。ただし認知項目に Awe のもう一つの中心要素である「壮大さ」は含まれていなかった。この Awe の特徴は研究 2 で検討することとした。また、「驚き」を感じた程度は「理解を超えていた」と同様の傾向を見せ、感動/Awe 条件と Awe 条件の間には有意な差がみられず、どちらも感動条件より有意に大きな値であった。一方で「考え方に変化があった」程度は、感動条件で他の 2 条件よりも有意に大きく、感動/Awe 条件と Awe 条件の間に有意な差は見られなかった。その他の感情項目では、感動/Awe 条件は Awe 条件よりも感動条件に似たパターンを示した。

感情項目では概して、感動条件と感動/Awe 条件が Awe 条件に比べてポジティブな感情を伴い、ネガティブな感情を引き起こさないという傾向がみられた。感動/Awe 条件と感動条件は、ポジティブな感情である「喜び」で Awe 条件より有意に大きく、ネガティブな感情である「悲しみ」「恐怖」で Awe 条件より有意に小さい値をとった。これと同様の傾向が「快さ」・「不快さ」の項目にも表れており、感動/Awe 条件と感動条件は Awe 条件に比べ有意に「快さ」で大きな値をとり、「不快さ」で小さな値をとっていた。さらに、感動/Awe 条件は感動条件よりも「快さ」の項目で有意に大きな値を、「不快さ」の項目で有意に小さな値をとっていた。

以上のことを総合すると、感動/Awe 条件では Awe と感動の両方が経験されていると考えられる。「考え方に変化があった」程度が感動条件で大きいという結果は、感動がその人にとって中心的な価値の強調により生じること (Cova & Deonna, 2014; 加藤・村田, 2013) を考慮すると、感動による考え方の変化は既存の考え方や価値観が強まるという変化である可能性を示唆している。一方、Awe 条件、感動/Awe 条件では「理解を超えていた」程度や「驚き」が大きかったことから、Awe を伴う感情経験は全く新しい考え方や異なる考え方に気づくという考え方の変化をもたらす可能性が考えられる。

最後に身体反応の項目に関して、「震えた」「鳥肌が立った」程度は、感動/Awe 条件で他の 2 条件に

表 3 項目ごとの分散分析及び t 検定の結果

	感動			畏怖			畏敬			快さ			不快さ		
	F	p		F	p		F	p		F	p		F	p	
下位比較条件対	458.92	.000***		62.01	.000***		35.86	.000***		247.89	.000***		133.28	.000***	
Awe・感動	t	p		t	p		t	p		t	p		t	p	
	-19.79	.000***		12.91	.000***		-2.24	.027*		-14.85	.000***		12.65	.000***	
感動・感動/Awe	-10.78	.000***		-5.70	.000***		-5.67	.000***		-8.70	.000***		2.84	.005**	
Awe・感動/Awe	-28.29	.000***		4.88	.000***		-7.96	.000***		-20.17	.000***		13.50	.000***	
平均値の大小関係 (Awe=a, 感動=m, 感動/Awe=m/a)	m/a > m > a			a > m/a > m			m/a > m > a			m/a > m > a			a > m > m/a		

	喜び			悲しみ			驚き			恐怖			共感		
	F	p		F	p		F	p		F	p		F	p	
下位比較条件対	357.88	.000***		102.76	.000***		124.35	.000***		146.65	.000***		70.51	.000***	
Awe・感動	t	p		t	p		t	p		t	p		t	p	
	-17.32	.000***		5.92	.000***		14.94	.000***		18.48	.000***		-12.55	.000***	
感動・感動/Awe	-10.43	.000***		8.56	.000***		-12.27	.000***		-1.58	.117		4.82	.000***	
Awe・感動/Awe	-24.19	.000***		13.94	.000***		1.64	.103		12.32	.000***		-6.60	.000***	
平均値の大小関係 (Awe=a, 感動=m, 感動/Awe=m/a)	m/a > m > a			a > m > m/a			a = m/a > m			a > m/a = m			m > m/a > a		

表 3 項目ごとの分散分析及び *t* 検定の結果 (つづき)

	涙ぐんだ			鳥肌が立った			震えた			理解を超えていた			考え方に変化があった		
	<i>F</i>	<i>p</i>		<i>F</i>	<i>p</i>		<i>F</i>	<i>p</i>		<i>F</i>	<i>p</i>		<i>F</i>	<i>p</i>	
下位比較条件対	44.40	.000***		113.15	.000***		28.64	.000***		68.02	.000***		18.22	.000***	
	<i>t</i>	<i>p</i>		<i>t</i>	<i>p</i>		<i>t</i>	<i>p</i>		<i>t</i>	<i>p</i>		<i>t</i>	<i>p</i>	
	-10.54	.000***		4.94	.000***		3.00	.003**		10.53	.000***		-5.34	.000***	
	感動・感動/Awe	.000***		-15.13	.000***		-7.71	.000***		-10.56	.000***		5.40	.000***	
Awe・感動/Awe	-5.42	.000***		-9.35	.000***		-4.31	.000***		-0.31	.760		0.09	.930	
平均値の大小関係 (Awe=a, 感動=m, 感動/Awe=m/a)	m > m/a > a			m/a > a > m			m/a > a > m			m/a = a > m			m > m/a = a		

p* < .05, *p* < .01, ****p* < .001

すべて 5%水準で大小関係を示した。

比べ有意に大きな値となっていた。この2項目について、感動条件はAwe条件に比べ有意に小さな値であった。感動との結びつきが強い「涙を流す」という身体反応に関連する、「涙ぐんだ」の項目は感動条件で他の2条件に比べ有意に大きな値であった。感動/Awe条件の「涙ぐんだ」の項目の評定値は感動条件より有意に小さく、Awe条件は他の2条件に比べ有意に小さな値をとった。

以上のことから、感動/Awe条件のような素晴らしい自然や技術に触れた際の感情経験は、感動という言葉で表現されやすいが、感情経験としてはAweと感動の両方を伴う可能性が示唆された。ただし研究1の限界点として、提示したエピソードは大学生サンプルから感動経験を集めた橋本・小倉(2002)をもとに作成しており、かつ、提示した感動に関わるエピソードは7種類のみであるので、全ての感動経験を網羅できている保証はなかったことが挙げられる。そこで研究2では、感動経験とAwe経験を幅広い年代から収集し、感動とAweの感情経験としての重複について検討する。

3. 研究2

研究2では、一部の強い感動経験はAweと考えられる感情を伴うという仮説2を検討する。感動経験は強く印象に残るものだけでなく、より日常的なものまで幅広く存在する。Aweが世界の見方を変化させ得ることを踏まえると(Keltner & Haidt, 2003), Aweの感情状態が生じ得るのは、日常の小さな感動よりも、強い感動経験においてであると考えられる。この点を検討するため、研究2では日常的な感動、人生における大きな感動、Aweを感じた経験のそれぞれについて自由記述を行ってもらい、その経験の際に感動やAweを感じた程度の評定を求めた。強い感動経験が日常的な感動よりもAweの感情を伴うのであれば、人生の感動条件は日常の感動条件に比べ、Aweを感じる程度が大きいと予想される。また、自由記述の内容を分析するとAwe条件にみられる内容は日常の感動条件よりも人生の感動条件と類似すると予想される。

3.1 方法

3.1.1 回答者

クラウドソーシングサービスのランサーズで質問紙への回答者を募集し、224名がオンラインで質問

紙に回答した。質問紙への回答は2018年7月に行われた。回答した224名のうち、16名は回答を中断していたため分析から除外した。また、感情経験の自由記述に対し3つの条件のうち少なくとも1つの条件で「なし」と答えた17名も分析から除外した。分析した191名(男性95名、女性93名、無回答3名)の年齢の範囲は20歳から73歳であり、平均年齢は39.5歳($SD = 9.93$)であった。回答者の海外滞在経験は経験なしの者を含め6年以内(2年以内が全体の94.8%)であった。回答者には謝金として150円が支払われた。

3.1.2 質問紙

回答者には、日常の感動条件、人生の感動条件、Awe条件の3条件すべてについて、自身の感情経験の想起・自由記述と、その感情経験の際に経験された感情や認知状態の程度の評定を求めた。自由記述の質問文はそれぞれ、「ここ1, 2週間で感動した出来事」(日常の感動条件), 「今までの人生において非常に感動した経験」(人生の感動条件), 「何か大きなもの、あるいは大きな存在に、壮かさや偉大さを感じ、世界や周りの環境や自分自身に関する、当時のあなたの理解が揺り動かされたような経験」(Awe条件)として、経験を想起し記述してもらった。Awe条件の自由記述を求める質問文では、Aweの感情についての記述を確実に得るため、「畏怖」や「畏敬」という言葉は用いなかった。代わりに、Awe経験の核となる「壮かさや偉大さ」「理解が揺り動かされた」という要素を含んだ質問文により記述を求めた。

自由記述の後に、その経験の際に感動した程度を5件法(1. 全く感動しなかった～5. とても強く感動した)で回答し、感動したと回答をした場合には何に対して感動したのかを自由記述で回答してもらった。その後、「畏怖」「畏敬」を感じた程度やAwe概念の中心である壮かさや理解を超えていたという感覚をどの程度経験したかについて5件法(1. 全くあてはまらない～5. とてもよくあてはまる)で尋ねた(表4)。また、Aweを経験した際には自己の小ささを感じたり、自己が大きな何かの一部であると感じたりすることが報告されているが(Shiota et al., 2007; Campos et al., 2013), このような感覚についての報告は感動については見られず、Aweに特有の感覚であると考えられる。そこで自己の小ささとい

表 4 条件ごとの各項目の評定の平均値と標準偏差

	感動		畏怖		畏敬					
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>				
日常の感動	3.81	1.08	1.93	1.11	2.42	1.26				
人生の感動	4.43	0.90	2.36	1.33	2.84	1.36				
Awe	3.37	1.44	3.50	1.39	3.31	1.31				

	壮大さ		大いなる存在		考えや理解が揺るがされた		意味のある体験		よくわからない体験	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
日常の感動	2.96	1.28	2.88	1.25	2.60	1.21	3.24	1.18	1.54	0.87
人生の感動	3.32	1.39	3.46	1.38	3.16	1.33	4.14	1.04	1.77	1.07
Awe	3.93	1.07	3.89	1.14	3.70	1.10	3.78	1.17	2.26	1.26

	自分の小ささ		自分は全体の 一部である		日頃の悩みの 小ささ		Vastness ^{a)}		Small self ^{b)}	
	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>
日常の感動	2.34	1.28	2.26	1.24	2.28	1.19	2.92	1.16	2.29	1.03
人生の感動	2.65	1.32	2.81	1.36	2.89	1.43	3.39	1.28	2.78	1.12
Awe	3.60	1.27	3.37	1.31	2.99	1.39	3.91	0.96	3.32	1.07

a) “Vastness”は「壮大さ」「大いなる存在」の2項目を回答者ごとに平均したものである。

b) “Small self”は「自分の小ささ」「自分は全体の一部である」「日頃の悩みの小ささ」の3項目を回答者ごとに平均したものである。

う感覚を経験した程度についても同じく5件法（1. 全くあてはまらない～5. とてもよくあてはまる）で回答を求めた（表4）。

各条件への回答の順序は、最初に日常の感動条件、次に人生の感動条件について記述と項目評定を行った後、最後に Awe 条件について回答を求めた。日常の感動条件は後続の質問への回答に与える影響が最も小さいと考えたため、最初に配置した。また、人生の感動条件の直後に Awe 条件への回答を求めると、人生の感動条件で書いた内容に影響を受け Awe 条件の回答が歪む可能性があると考えたため、人生の感動条件への回答の直後には他の質問群を配置した。質問群は、性格特性としての畏怖畏敬を感じる傾向を測る、武藤 (2016) の畏怖項目を一部改変したもの（例：周りの人や自然の大きな存在を感じて、自分の限界に気づくことがよくある）や Shiota, Keltner, & John (2006) で用いられた項目（例：ほぼ毎日何かに対して不思議さを感じる）計12項目、日常における感動のしやすさ、幸福度などであった。ただし、これらの項目については本研究の分析には含めない。この質問群の後に Awe 条

件への回答を求めた。最後に、性別や年齢などのデモグラフィック項目への回答を求めた。

3.2 結果と考察

3.2.1 評定値分析

分析には統計ソフトウェアの R 3.5.1 を使用し、パッケージ afex (Singmann et al., 2018) を用い、有意水準を 5% とした。

評定を求めた各項目の平均値と標準偏差を表4に示した。感情経験の種類（3条件：日常の感動・人生の感動・Awe）と評定を求めた項目群（11条件）を要因とする2要因被験者内分散分析を行った。その結果、交互作用の効果は有意であった（ $F(14.73, 2798.69) = 26.49, MSE = 1.09, p < .001$ ）。そこで項目ごとに分散分析を行い、有意だった項目について感情経験の種類の3条件のうち2条件の組合せすべてについて t 検定を行った。各項目の分散分析と t 検定の結果は表5に示した。

感動した程度は人生の感動条件で最も高く、他の2条件に比べ有意に大きな値をとり、日常の感動条件は Awe 条件に比べ有意に大きな値をとった。し

たがって人生の感動条件と日常の感動条件では Awe 条件に比べ、感動が生じた経験が報告されたと考えられる。

次に、人生における感動経験の中で、日常の感動に比べ Awe と定義される感情が経験されているかを確認した。まず、Awe の中心要素の一つである存在の大きさを感じた程度として、「壮大さ」と「大いなる存在」の 2 項目の平均を回答者ごとにとり、「Vastness」を示す値とした。 α 係数は 0.69 から 0.83 であった。この値は人生の感動条件で日常の感動条件よりも有意に大きかった。次に Awe のもう一つの中心要素である「考えや理解が揺るがされた」程度を測定する項目は、人生の感動条件で日常の感動条件よりも有意に大きな値をとった。「Vastness」と「考えや理解が揺るがされた」の項目について、Awe 条件では一貫して他の 2 条件に比べ有意に大きな値をとっていた。Awe 経験により生じるとされる「自己の小ささ」の感覚に関する項目は、関連する 3 項目（「自分の小ささ」「自分は全体の一部である」「日頃の悩みの小ささ」）の平均値を回答者ごとに算出し、「Small self」を示す値とした。 α 係数は 0.73 から 0.79 であった。「Small self」の値は、日常の感動条件で人生の感動条件に比べ有意に小さな値をとった。「畏怖」と「畏敬」の項目においても日常の感動条件は人生の感動条件に比べ有意に小さな値をとっていた。「Small self」「畏怖」「畏敬」すべての項目で Awe 条件は他の 2 条件に比べ有意に大きな値であった。これらのことは、人生での大きな感動が日常的な感動に比べ Awe の感情を強く経験していることを示唆し、仮説 2 を支持する結果であった。

また「意味のある体験」であったとする程度は、人生の感動条件において Awe 条件に比べても有意に大きな値をとっており、「よくわからない体験」であったとする程度は人生の感動条件で Awe 条件に比べ有意に小さい値であった。これらの結果と人生の感動条件では日常の感動条件に比べ Awe の 2 つの中心要素を強く経験していたことから、人生の感動条件のような強い感動経験では、Awe によって認知的枠組みが変化し、新たに得られた考え方や認知的枠組みに意味や価値を見出すことで感動が生じている可能性が考えられる。

3.2.2 内容分析

各条件での自由記述の内容を分析するために、コーディングカテゴリを作成し、そのカテゴリ内容が含まれているか否かについて研究目的を知らない 5 名がコーディングを行った。記述は各条件に 191 個ずつ、合計 573 個であった。5 名のうち 3 名はすべての記述を、残り 2 名はそれぞれ 300 個、273 個の記述をコーディングした。したがって、1 つの記述につき 4 名がコーディングを行った。コーディングカテゴリのうち、どの条件においてもそのカテゴリに属する記述の数が条件内の記述全体の 5% に満たないものについては分析から除外した。分析に含めたカテゴリについて、複数人評定者間の一致度 (Fleiss, 1971) を算出したところ、 κ 係数の範囲は 0.31 から 0.96 ($M = 0.63$) であった (表 6)。カテゴリごとに各条件について、条件内の記述全体に対し、そのカテゴリ内容を含む記述が占める割合のコーダー 4 名の平均値を表 6 に示した。コーディングカテゴリには出来事の主体に関するもの、内容に関するもの、出来事に表れている価値に関するもの、話の流れに関するものが含まれていた。出来事の主体の 4 つのカテゴリと話の流れの最終的にポジティブ/ニュートラル/ネガティブの 3 カテゴリについて、コーダーは各記述が最も適当な一つのカテゴリに属するようにそれぞれコーディングすることが求められた。出来事の内容や表れている価値、話の流れの中のポジティブあるいはネガティブな要素を含むというカテゴリについては、一つの記述が複数のカテゴリに属することも可能であった。

コーディング結果の分析には、統計ソフトウェアの R 3.5.1, パッケージ lmerTest (Kuznetsova, Brockhoff, & Christensen, 2018) を用いた。コーディングカテゴリごとに混合効果ロジスティック回帰分析を行った。目的変数はそのカテゴリに分類される記述数の条件内の記述全体に対する割合、説明変数は感情経験の種類 (日常の感動・人生の感動・Awe の 3 条件) とし、回答者と評定者をランダム変数とした。ランダム変数として評定者を組み込んでいたので、評定者間一致度の低さは分析において考慮され则认为、一致度の低いカテゴリにおいても分析を行った。ダミー変数のうち、感動の変数は人生の感動条件と日常の感動条件を 0.5, Awe 条件を -1 とし、認知的枠組みの更新の変数は人生の感動

表 5 項目ごとの分散分析及び, t 検定の結果 (つづき)

	自分の小ささ			自分は全体の一部である			日頃の悩みの小ささ			Vastness			Small Self		
	F	p		F	p		F	p		F	p		F	p	
下位比較条件対	69.93	.000***		53.36	.000***		24.39	.000***		56.68	.000***		73.46	.000***	
	t	p		t	p		t	p		t	p		t	p	
	8.44	.000***		5.14	.000***		0.94	0.35		5.53	.000***		6.40	.000***	
	2.81	.006**		5.24	.000***		5.70	.000***		4.98	.000***		5.87	.000***	
Awe・人生の感動	11.58	.000***		10.24	.000***		6.31	.000***		10.93	.000***		11.82	.000***	
人生の感動・日常の感動															
Awe・日常の感動															
平均値の大小関係 (Awe=a, 人生の感動=m, 日常の感動=d)	a > m > d			a > m > d			a = m > d			a > m > d			a > m > d		

** $p < .01$, *** $p < .001$

すべて 5%水準で大小関係を示した。

表6 各カテゴリーの記述の割合と混合効果ロジスティック回帰の結果

	日常の 感動 (%)	人生の 感動 (%)	Awe (%)	感動		認知的枠組の更新		κ 係数
				z	p	z	p	
自分自身の出来事	41.5	76.6	69.2	1.13	=.26	14.22	<.001	
主 家族や友人の出来事	18.5	10.5	5.2	0.63	=.53	-0.78	=.44	0.75
体 メディアで見聞きした実話	37.3	7.7	24.1	-1.37	=.17	-2.10	=.036*	
フィクション	2.7	5.2	1.4	0.59	=.55	0.36	=.72	
結婚	1.3	5.6	0.8	0.55	=.58	0.50	=.62	0.86
恋愛	0.8	5.1	0.7	0.53	=.60	0.52	=.60	0.85
妊娠・出産	2.9	15.4	3.7	0.70	=.48	0.74	=.46	0.96
病気・事故	10.1	7.9	3.1	0.59	=.56	-0.19	=.85	0.73
死別	3.5	5.8	7.9	-0.53	=.60	0.38	=.70	0.70
受験・就職 ^{a)}	2.4	8.6	1.8	0.69	=.49	0.64	=.52	0.88
勝負事・スポーツ	25.3	5.9	3.7	0.23	=.82	-1.23	=.22	0.90
文学作品・芸術作品	10.3	13.2	5.5	0.72	=.47	0.19	=.85	0.63
自然	16.2	12.6	54.2	-15.0	<.001	-0.35	=.73	0.81
宇宙	0.8	0.8	8.5	-0.60	=.55	0.04	=.97	0.92
災害	10.6	5.2	27.2	-1.18	=.24	-0.41	=.69	0.94
旅行・異文化	2.4	11.1	17.3	-0.75	=.45	1.03	=.31	0.68
宗教	0.4	0.4	6.8	-0.85	=.40	0.11	=.91	0.75
運命	0.8	4.1	6.2	-0.43	=.67	0.92	=.36	0.47
他者とのつながり・愛情	30.4	41.2	9.2	8.67	<.001	2.51	=.012*	0.65
達成	16.8	22.5	4.5	2.82	<.01	0.56	=.57	0.53
努力・忍耐・継続	19.1	14.7	4.2	1.74	=.083	-1.24	=.21	0.45
成長の気づき	13.2	8.1	1.4	1.22	=.22	-0.52	=.61	0.61
自分への誇り	3.1	10.5	0.9	1.85	=.065	1.59	=.11	0.47
他者や集団への誇り	26.0	11.8	8.6	2.55	=.011*	-5.17	<.001	0.31
勇気	6.2	2.2	1.3	0.21	=.83	-0.94	=.35	0.46
利他行動・自己犠牲	12.8	8.0	3.7	0.71	=.48	-0.45	=.66	0.59
協力・協調	6.4	5.9	2.2	0.97	=.33	-0.20	=.84	0.33
技術	8.2	4.7	5.0	0.11	=.91	-1.16	=.25	0.37
美しさ	4.8	9.8	14.7	-0.76	=.45	0.58	=.56	0.63
強さ	17.1	8.8	14.8	-3.44	<.001	-4.08	<.001	0.35
神聖さ	2.4	5.9	12.3	-1.18	=.24	0.97	=.33	0.44
生命の尊さ	9.3	13.7	8.2	0.39	=.70	0.58	=.56	0.55
幸運	4.3	5.4	5.0	0.22	=.82	0.20	=.84	0.56
ポジティブな要素を含む	96.9	96.6	65.2	3.51	<.001	-0.11	=.92	0.68
ネガティブな要素を含む	47.3	41.2	48.8	-1.98	=.047*	-1.70	=.089	0.65
最終的にポジティブ	94.5	94.0	57.1	9.25	<.001	-0.06	=.95	
最終的にニュートラル	3.5	4.7	24.2	-7.38	<.001	0.39	=.69	0.61
最終的にネガティブ	2.0	1.3	18.7	-1.72	=.086	-0.17	=.87	

* $p < .05$

a) 「受験・就職」のカテゴリーは推定が収束しなかったため、ランダム変数から評定者を除いた際の分析結果を示した。

条件と Awe 条件を 0.5, 日常の感動条件を -1 とした。混合効果ロジスティック回帰の結果を表 6 の右側の列に示した。

出来事の主体について、Awe 条件と人生の感動条件では日常の感動条件に比べ自分自身が主体である記述が有意に多かった。一方で、日常の感動条件では他の 2 条件に比べ、メディアで見聞きした実話に関する記述が多かった。日常の感動条件の記述には調査を行ったときに話題になっていたニュースやスポーツ中継に関する記述（例：サッカー W 杯での日本代表の活躍）が多くみられた。このことから、人生における大きな感動や Awe の経験には自分自身が直接経験したことが重要であると考えられる。他方、日常的に起こる感動はメディアを通して伝えられる他者の出来事に共感する形で起こることが多いと推測される。

出来事の内容に関しては多くのカテゴリで条件間の有意な差がみられなかった。唯一、「自然」のカテゴリのみ Awe 条件で他の 2 条件に比べ有意に多い記述がみられた。自然に関する記述は Awe 条件の記述の過半数を占めていた。一方、人生の感動条件は結婚や妊娠・出産などのライフイベントに関する記述が多い傾向にはあったが、特定のカテゴリに偏ることはなかった。このことは、強い感動が様々な出来事に関して生じることを示唆している。

記述された出来事に表れている価値について、日常の感動条件と人生の感動条件では Awe 条件に比べ何らかの価値が表現されている記述が多い傾向にあった。特に「他者とのつながりや愛情」を表す記述は、日常の感動条件で 30.4%、人生の感動条件で 41.2% 存在し、Awe 条件の 9.2% に比べ有意に多かった。同様に「達成」の要素を含む記述の割合も、Awe 条件では他の 2 条件に比べ有意に小さかった。「他者や集団への誇り」の要素を含む記述の割合は日常の感動条件で他の 2 条件に比べ有意に大きかったが、これは日常の感動条件における記述された出来事の主体が他の 2 条件と比較して、自分自身であるものが少なく、メディアで報じられた他者であることが多いことに起因すると考えられる。「強さ」の要素を含む記述の割合は、日常の感動条件と Awe 条件それぞれが人生の感動条件に比べ有意に大きかった。ただし、日常の感動条件で「強さ」のカテゴリに分類された記述はサッカーワールドカップ

における代表選手の強さに関するものなどであったのに対し、Awe 条件では自然の力強さに関するものが中心であった。

人生の感動条件および日常の感動条件では最終的に肯定的とみなされる出来事の記述が 90% 以上みられ、Awe 条件に比べ有意に多かった。このことから、感動した経験は最終的には肯定的にとらえられるものであるのに対し、Awe の経験は必ずしも肯定的にとらえられるものとは限らないという点で異なると考えられる。

記述内容の分析結果を総合すると、Awe 条件と人生の感動条件は記述された出来事の主体が自分自身である割合が高いという点で類似していた。しかし、以下の 3 つの点において人生の感動条件は Awe 条件よりも日常の感動条件に類似し、Awe 条件とは異なる傾向を見せた。まず記述された出来事の内容において、Awe 条件は「自然」に関する記述が多くみられたのに対し、人生の感動条件での出来事の内容は様々なカテゴリに分散していた。次に出来事に表れた価値において、感動経験の記述では他者とのつながりなどの何らかの価値が表れている記述が多いのに対し、Awe 経験の記述には必ずしも価値が表出されるわけではないことが示唆された。最後に、出来事最終的なとらえられ方において、感動経験はほとんどが肯定的にとらえられる一方で、Awe 経験は必ずしも肯定的にとらえられてはいないと考えられる。

4. 総合考察

4.1 結果のまとめ

研究 1 では、Awe 経験とされる素晴らしい自然や技術に触れた経験に対し、日本語話者が感動というラベル付けをすることが支持された。ただし、感情経験としては Awe 条件と感動条件のどちらとも類似性が見て取れた。研究 2 では、日常的な感動に比べ、人生における大きな感動経験では、Awe の中心要素である存在の大きさや認知的枠組みの更新を知覚する程度が高いことから、Awe をより強く経験していることが支持された。また、自由記述の内容分析から、Awe と人生における大きな感動は過半数が自分自身に起こった出来事の記述であり、自分自身が出来事の主体であることが重要である点で類似していた。しかし、出来事の内容や価値の表出において Awe と人生における感動の類似性は見られ

ず、人生の感動はむしろ日常の感動の記述と類似の傾向を示していた。人生の感動と日常の感動はどちらも他者とのつながりや愛情などの価値が記述の中に表れているものが多く、最終的に肯定的にとらえられている出来事が大半を占めた。

4.2 感動・Awe 研究への示唆

感動経験の中には Awe を定義づける「存在の大きさ」と「理解を超えていた」という感覚を伴うものがあることが示された。したがって、人の考えや行動に与える影響などが特に強い感動経験は、Awe を伴っている可能性がある。感動経験に Awe の感情が伴うメカニズムとしては、二通り考えられる。一つは、壮大さを有し、既存の世界の見方では理解できないような刺激を前に、Awe を感じ認知的枠組みの変更が試みられる。そして新たに得た考え方や世界の見方に当人が価値や意味を見出した時、感動が生じるというように、Awe が先行するプロセスである。二つ目は、Awe を引き起こす壮大さを持ち、理解を超えているような刺激（例：想像を超えるほどたくさんの人々が協力して災害からの復興を成し遂げる）が、望ましい価値（例：絆）を備えているために、その刺激により両方の感情が同時に生じるというプロセスである。前者のメカニズムにより感動経験に Awe の感情が伴う場合は、変更された認知的枠組みが肯定的に受け入れられており、人の価値観の形成により大きな影響を与える可能性が考えられる。

日常的な感動についてはメディアが大きく関わっていたが、ニュースの報道やスポーツ選手のインタビューに関しては文化により違いがあることが報告されている (Markus, Uchida, Omoregie, Townsend, & Kitayama, 2006; Morling & Lamoreaux, 2008)。さらに、感動経験に関して自身の理想や価値観に合っていたとする評定値が高かったという Menninghaus et al. (2015) の報告を踏まえると、メディアによる報道などはその文化の人々が持つ価値観に沿った部分を強調することによって、日常的な感動が引き起こされやすく、また周囲の人々が同時に感動することで、共通の価値観を広めやすくなっているのかもしれない。またこのことから、同じ内容であっても他国のメディアから伝えられた場合より、自国のメディアから伝えられた場合の方がその国の文化の価値観に沿った伝え方をしており、感動を与えやすい

という可能性が考えられるがこれは今後の研究課題である。

さらに、日常で起こる感情経験においても、文化差が存在するといわれている。Kitayama, Mesquita, & Karasawa (2006) は、日本人は北米人に比べ、「親しみ」などの社会的な関係の中から得る感情をより頻繁に経験しており、「誇り」などの個人的な感情は北米人の方がより頻繁に経験していることを報告している。この仮説に従えば、日本人は北米人に比べ、社会的相互作用の中での他者とのつながりによる感動を頻繁に経験しているかもしれない。感動の頻度や程度、誘因となる価値と文化の関連について検討することは、文化の形成や拡散の仕組みを知る一助となり得るだろう。

4.3 本研究の限界点と今後の課題

今回の研究はすべて自己報告の指標を用いている。したがって付随する感情などの評定については、意識できている範疇に限られており、言語化できるものしか扱えていない。また、条件の操作を過去の感情経験の想起・記述により行っているため、本当に感動や Awe の感情経験が追体験されているかは定かではない。したがって、映像刺激などを用いて感動や Awe を実際に経験するよう条件の操作を行い、同様の結果が得られることを確認するのが望ましい。その場合、特に身体反応の項目評定は、主観的な自己報告でなく、実際に感情が喚起されている状態で客観的指標を用いるのが良いであろう。また、本研究は日本人に焦点を絞って行ったが、同じ感情でも文化によってその感情が生じる状況や主要な要因、程度や頻度が異なることが分かっている (Boiger, Ceulemans, De Leersnyder, Uchida, Norasakkunkit, & Mesquita, 2018)。特に感動が生じる状況やその頻度は、その文化で重視される価値により異なる可能性があるため、研究対象を他の文化圏で生活する人々に広げ、文化との関連を検討することは感動経験の文化普遍的な要素とそうでない要素を明らかにし、感動の核となる要素やメカニズムを解明することにおいて大きな意味を持つだろう。

文 献

- Boiger, M., Ceulemans, E., De Leersnyder, J., Uchida, Y., Norasakkunkit, V., & Mesquita, B. (2018). Beyond essentialism: Cultural differences in emotions revisited. *Emotion*, 18, 1142. doi: 10.1037/emo0000390
- Campos, B., Shiota, M. N., Keltner, D., Gonzaga, G. C., & Goetz, J. L. (2013). What is shared, what is different? Core relational themes and expressive displays of eight positive emotions. *Cognition and Emotion*, 27, 37–52. doi: 10.1080/02699931.2012.683852
- Cova, F., & Deonna, J. A. (2014). Being moved. *Philosophical Studies*, 169, 447–466. doi: 10.1007/s11098-013-0192-9
- Fiske, A. P., Seibt, B., & Schubert, T. (2019). The sudden devotion emotion: Kama Muta and the cultural practices whose function is to evoke it. *Emotion Review*, 11, 74–86. doi: 10.1177/1754073917723167
- Fleiss, J. L. (1971). Measuring nominal scale agreement among many raters. *Psychological Bulletin*, 76, 378–382.
- Gordon, A. M., Stellar, J. E., Anderson, C. L., McNeil, G. D., Loew, D., & Keltner, D. (2017). The dark side of the sublime: Distinguishing a threat-based variant of awe. *Journal of Personality and Social Psychology*, 113, 310–328. doi: 10.1037/pspp0000120
- 橋本 巖・小倉 丈佳 (2002). 青年期における感動経験と共感性の関係 愛媛大学教育学部紀要 (教育科学), 48(2), 57–73.
- 加藤 樹里・村田 光二 (2013). 有限の顕現化と社会的価値の志向性が悲しみを伴った感動に及ぼす影響 心理学研究, 84, 138–145. doi: 10.4992/jjpsy.84.138
- Keltner, D., & Haidt, J. (2003). Approaching awe: A moral, spiritual, and aesthetic emotion. *Cognition and Emotion*, 17, 297–314. doi: 10.1080/026999303020297
- Kitayama, S., Mesquita, B., & Karasawa, M. (2006). Cultural affordances and emotional experience: Socially engaging and disengaging emotions in Japan and the United States. *Journal of Personality and Social Psychology*, 91, 890–903. doi: 10.1037/0022-3514.91.5.890
- Kuznetsova, A., Brockhoff, P. B., & Christensen, R. H. B. (2018). lmerTest: Tests in linear mixed effects models (Version 3.0-1). Retrieved from <https://CRAN.R-project.org/package=lmerTest> (2019 年 1 月 22 日)
- Markus, H. R., Uchida, Y., Omoregie, H., Townsend, S. S. M., & Kitayama, S. (2006). Going for the gold: Models of agency in Japanese and American contexts. *Psychological Science*, 17, 103–112. doi: 10.1111/j.1467-9280.2006.01672.x
- Maruskin, L. A., Thrash, T. M., & Elliot, A. J. (2012). The chills as a psychological construct: Content universe, factor structure, affective composition, elicitors, trait antecedents, and consequences. *Journal of Personality and Social Psychology*, 103, 135–157. doi: 10.1037/a0028117
- Menninghaus, W., Wagner, V., Hanich, J., Wassiliwizky, E., Kuehnast, M., & Jacobsen, T. (2015). Towards a psychological construct of being moved. *PLoS ONE*, 10(6), e0128451. doi: 10.1371/journal.pone.0128451
- Morling, B., & Lamoreaux, M. (2008). Measuring culture outside the head: A meta-analysis of individualism-collectivism in cultural products. *Personality and Social Psychology Review*, 12, 199–221. doi: 10.1177/1088868308318260
- 武藤 世良 (2014). 尊敬関連感情概念の構造—日本人大学生の場合— 心理学研究, 85, 157–167. doi: 10.4992/jjpsy.85.13021
- 武藤 世良 (2016). 特性尊敬関連感情尺度 (青年期後期用) の作成の試み 心理学研究, 86, 566–576. doi: 10.4992/jjpsy.86.15205
- Nakayama, M., & Uchida, Y. (in press). Meaning of awe in Japanese (con)text : Beyond fear and respect. *Psychologia*. doi: 10.31234/osf.io/nf78w
- Piff, P. K., Dietze, P., Feinberg, M., Stancato, D. M., & Keltner, D. (2015). Awe, the small self, and prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 108, 883–899. doi: 10.1037/pspi0000018
- Schubert, T. W., Zickfeld, J. H., Seibt, B., & Fiske, A. P. (2016). Moment-to-moment changes in feeling moved match changes in closeness, tears, goosebumps, and warmth: Time series analysis. *Cognition and Emotion*, 32, 174–184. doi: 10.1080/02699931.2016.1268998
- Shiota, M. N., Keltner, D., & John, O. P. (2006). Positive emotion dispositions differentially associated with Big Five personality and attachment style. *The Journal of Positive Psychology*, 1, 61–71. doi: 10.1080/17439760500510833
- Shiota, M. N., Keltner, D., & Mossman, A. (2007). The nature of awe: Elicitors, appraisals, and effects on self-concept. *Cognition and Emotion*, 21, 944–963. doi: 10.1080/02699930600923668
- Singmann, H., Bolker, B., Westfall, J., Aust, F., Højsgaard, S., Fox, J., ..., Christensen, R. H. B. (2018). afex: Analysis of factorial experiments (Version 0.22-1). Retrieved from <https://cran.r-project.org/package=afex> (2019 年 1 月 22 日)
- Strick, M., & Soolingen, J. V. (2017). Against the odds: Human values arising in unfavourable circumstances elicit the feeling of being moved. *Cognition and Emotion*, 32, 1231–1246. doi: 10.1080/02699931.2017.1395729
- 戸梶 亜紀彦 (2004). 『感動』体験の効果について—人が変化するメカニズム— 広島大学マネジメント研究 4, 27–37. doi: 10.15027/17988
- Zickfeld, J. H., Schubert, T. W., Seibt, B., Blomster, J. K., Ariaga, P., Basabe, N., ..., Fiske, A. P. (2019). Kama muta: Conceptualizing and measuring the experience often labelled being moved across 19 nations and 15 languages. *Emotion*, 19, 402–424. doi: 10.1037/emo0000450



前浦 菜央

京都大学総合人間学部卒業。現在は、京都大学大学院人間・環境学研究科修士課程に在学中。感情研究に関心があり、現在は感動経験を専門的に研究している。今後は、感動経験の持つ機能に焦点を当て、感動経験が対人関係や人の行動に与える影響について研究したいと考えている。日本社会心理学会会員。



中山 真孝（正会員）

京都大学大学院教育学研究科博士課程研究指導認定退学。博士（教育学）。京都大学研究員、カーネギーメロン大学客員博士研究員を経て、2018年より京都大学こころの未来研究センター助教。様々な階層で集合的に創発するこころのダイナミクスを考えている。日本心理学会、日本認知心理学会、日本社会心理学会、日本基礎心理学会、Association for Psychological Science 会員。



内田 由紀子

専門は文化心理学・社会心理学。京都大学教育学部卒業、大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士（人間・環境学）。ミシガン大学、スタンフォード大学客員研究員、甲子園大学人文学部講師、京都大学こころの未来研究センター助教、准教授を経て、2019年より同教授。スタンフォード大学 Center for Advanced Study in the Behavioral Sciences フェロー（2019年度）。2014年「たちばな賞」（京都大学最優秀女性研究者賞）、2016年日本心理学会国際賞（奨励賞）授賞。近著に『これからの幸福について：文化的幸福観のすすめ』（新曜社）。